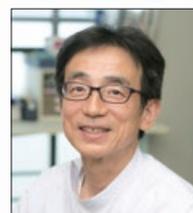


総合病院における 和漢診療科の現状と役割

医療法人社団顕鐘会 神戸百年記念病院 和漢診療科 医長 堀江 延和 先生

1987年 岩手医科大学医学部 卒業後、和歌山県立医科大学医学部 小児科に入局
1992年 那智勝浦町立温泉病院 小児科 医長
2003年 富山医科薬科大学(現、富山大学) 和漢診療学講座
2004年 紀南総合病院 小児科 副部長
2005年 麻生飯塚病院 漢方診療科
2008年 神戸百年記念病院 和漢診療科



開院100周年を機に名称も改められた神戸百年記念病院は、神戸市兵庫区の地で長年地域医療に貢献している歴史ある病院である。同院における漢方診療は、その歴史が古いだけでなく、現在では煎薬も処方できる体制が整えられている。「これからの医療において漢方診療のニーズはますます高い」とおっしゃる和漢診療科 医長の堀江延和先生に、総合病院における和漢診療科の現状と役割について伺いました。

長年にわたり地域医療に貢献する当院の和漢診療科

当院の前身は、1907年に開業した鐘淵紡績(後のカネボウ)の「兵庫工場附属病院」です。開院当時は従業員のための施設でしたが、1923年には近隣住民も診療するようになりました。しかも生活困窮者には無料で診療していたようです。

1945年には戦災で工場の大半は消失してしまい、工場は大阪に移転したのですが、被災を免れた病院は引き続き当地で診療を続けました。そして開院100周年を迎えた2007年には「神戸百年記念病院」と名称を改め、『地域になくてはならない病院になる』を基本理念に地域医療に貢献しています。

当院における漢方診療の歴史は、1982年に開設された「漢方診療科」に遡ります。当時は森雄材先生、伊藤良先生、桑木崇秀先生という漢方界では著名な先生方が交代で診療されていました。

そして1994年には、当院の特徴作りの一つに漢方診療の強化が掲げられました。上羽康之院長(現、理事長)が中心となって漢方室が設置され、富山医科薬科大学(現、富山大学)和漢診療学講座の指導の下に本格的な取り組みが始まり、翌年には鎌田晃彰先生が常勤医として着任されました。しかも薬局には漢方調剤室が併設され、病棟でも煎薬を提供できるという、全国でも稀有な体制が確立しまし

た。現在は、私が診療を担当していますが、患者さんは関西圏に限らず、広域から受診されています。

当科における漢方診療の現状

診療においては当然ながら、脈診、舌診、腹診やさまざまな訴えから患者さんの情報を入手しますが、患者さんにとっては丁寧に診察してもらっている印象があるようです。また、漢方薬の処方だけでなく生活指導や食事指導も丁寧に行っていますので、患者さんは私に家庭医としての側面を感じておられるようです。

当科で扱う疾患・領域は多岐にわたりますし、年齢層も非常に幅広いです(図1、2)。当科を受診される患者さんの中には、西洋医学的な治療を受けたくないから漢方治療を希望されるという方もいらっしゃいます。しかし、疾患やその時の状態によっては西洋医学的な治療を優先すべき場合があります。その際には、患者さんにきちんと説明をして納得いただいてから専門の診療科で西洋医学的な治療を受けていただき、当科では患者さんのADLやQOLを低下させないように必要に応じて漢方治療や食事指導を補助的に行います。

一方で、院内からの紹介患者さんもいらっしゃいます。たとえば当院の整形外科は脊椎疾患の治療に実績がありますが、整形外科的な治療で大きな痛みは取れたけれど、

わずかにしびれが残るような場合などです。

このように、洋の東西を問わずに今できる最高の医療を提供したいと考えています。

漢方の良さを広くアピール

私は長年、和歌山県の臨床病院に小児科医として勤務していましたが、当時から漢方にも興味がありましたので勉強会にも積極的に参加していました。ある勉強会で、「小児の嘔吐下痢症に五苓散の注腸が効果的」と広瀬滋之先生らから教えていただき、私も早速実践したところ非常に有効であり、漢方薬の効果を実感しました。それからはさらに漢方にのめり込むように勉強を続け、富山医科薬科大学和漢診療学講座への短期留学、麻生飯塚病院漢方診療科での勤務を経て、当院に赴任しました。

現在は、日々の漢方診療に加え、漢方薬の良さを西洋医学がご専門の先生へ広くアピールすることも必要と考えて、臨床研究の成果を専門分野の学会で発表しています。昨年は過活動膀胱に対するクラシエ猪苓湯エキス細粒の効果について研究結果を発表しました。猪苓湯は患者さんの症状およびQOLの低下に対して有用であることが明らかとなりました。漢方薬は副作用も少ないので、漢方をご

図1 当院の疾患・領域別患者数(2014年度)

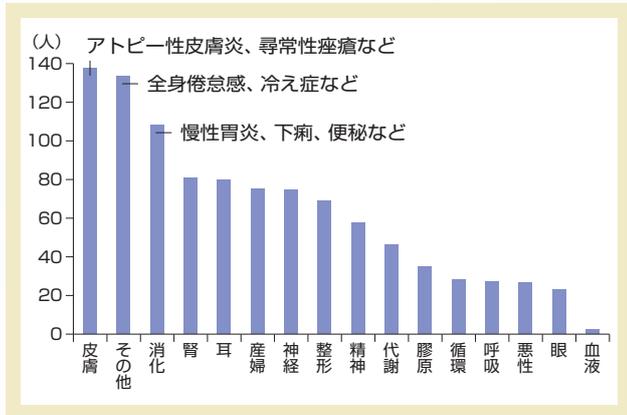
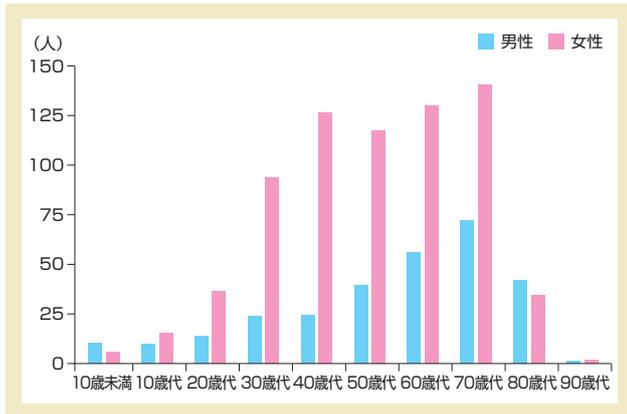


図2 当科の年代別患者数(2014年度)



存じない先生でも試してみてよい治療法だと思います。さらに、この成果が患者さんの満足度の向上につながれば良いと思っています。

漢方薬の飲みやすさ -八味地黄丸の丸薬-

患者さんに漢方薬をきちんと服用していただくために、患者さんのさまざまなご要望にできるだけお応えできるよう、当科では種々の剤形を選択できる体制を整えています。

たとえば、八味地黄丸は細粒剤や顆粒剤の粉薬や錠剤だけでなく、丸薬も処方できます。特に丸薬は、本来の生薬の良さをそのまま生かせるというメリットがあり、粉薬に比較して効果が高いという印象があります。

丸薬のもう一つの利点は、飲みやすさです。粉薬だと地黄の独特な味のために飲みにくい、錠剤は粒が大きくて飲みにくいとおっしゃる患者さんには好評です。

このように八味地黄丸をしっかりとお効かせたい、継続してきちんと服用していただきたい患者さんには丸薬を選択しています。

これからの医療における漢方診療の役割

患者さんの訴えは多様化していますので、幅広く患者さんの全身を診る漢方診療は、これからの医療にますます貢献できると思いますし、もし何らかの疾患があれば、専門の診療科をご紹介します。

緩和的な医療における役割も大きいと思います。たとえば、がん末期の患者さんをご自宅でどのように看取るかはこれからの課題ですが、まずは患者さんご自身の口から食べられ、少しでも体が楽になることが大事であり、そこに漢方の出番は確実にあると思います。

これからの医療において、漢方のニーズはますます増えると思っていますし、漢方のさらなる発展に少しでも貢献したいと思っています。